

全小道研究大会の報告

【於 品川区立八潮北小学校 1990. 2. 22 上野】

校内多忙な時、わざわざ東京まで1泊しての研究会参加させてもらったので、その概要を報告します。まとまった形では書いていない余裕がないので、思いっきりままに印象に残ったことを書きます。

(公開授業・大会の様子などビデオに収録してありますので利用して下さい)

1 公開授業を参観して

会場校の研究主任をしておられる小川先生(6年)の学級の授業を見せてもらった。

「東風園の人たち」(勤労・社会への奉仕)の主題での授業だった。

まず、ハッとさせられたのは、授業の始まりだった。開始のチャイムが鳴り終わると、「ちょっとみんなに教えてほしいことがあるんだけどね……」と、先生が静かに語り始められて授業が始まったのである。どこの学校でも当り前のようにやっている「起立・礼」がない。「起立・礼」は授業の終わりにもなかった。「じゃ終わりましたよ」と静かに言われて、それで授業は終わったのだった。そのことにまず私は感動した。小川先生の道徳の授業に対する見識の高さがそこに出ていると思ったからである。道徳の授業は、「自己を素直に振り返り、あるがままの自分自身と語り合わせる時間」であり、そのためには、子どもたちをもっとも自然な姿で授業に入らせたという願いがそこにはある。

授業中の小川先生の言葉は、子どもの体にしみこんでいくような柔らかさと温かさを持っており、この先生の誠実な人柄や、子どもをととても大事にされていることがよくわかった。

授業の展開については基本過程に基づくものであったが、いわゆる類型化を前面に押し出したものはなかった。「○○さんと同じようなこと思った人、ちよつと手をあげてみて」と、軽く子どもの思考の傾向をさぐられる程度であった。類型化については、午後の講演で提唱者の瀬戸先生自身が、

「言葉が一人歩きして困る。類型化といって、子どもの考えをワクにはめこむことではない。無理に類型化という言葉を使ってもらわなくていいのです。」と言われていた。

資料による価値追求の場面は、私の感じでは重かった。私は以前から疑問に思っているのだが、どうして資料をしまわねばならないのだろうかと思う。一読しただけで資料の内容をつかむことは本当に可能なのだろうか。子どもの発言の声は小さく、どこか不安げだった。それは、多数の参観者の囲まれて緊張したということだけではなく、資料の理解に不確かなままに先生の問いに答えさせられていることがあるように思った。発言の内容も当然のことながら、表層をなぞったようなものが多かった。いわゆる価値の主體的自覚(この言葉は使われていない)の部分は、自分たちの体験を書かされていた。その中から何人かを選んで読まされたのだが、どれもとてもいい内容で、私の見た限り、この一時間の中で、最も子どもが深く集中していたように思った。しかし、その内容が前段の資料による価値追求の過程から導き出されたものかどうかは疑問である。

いろいろ思うことはあるが、これまで私が見せてもらった道徳の授業の中では、最もいいものだった。

2 研究発表について

全部で5本の発表があった。主に道徳の授業に焦点を当てたもの、道徳的実践に焦点を当てたもの、地域との連携に焦点を当てたものと分けられるが、一言で言えば、何も新しい実践など出ていなかった。

道徳の授業について言えば、基本過程をどう効率的に進めるかということであり、その提案は、キャッシュフレーズだけ新しく（例えば「ロケット式発問」などと）しているだけで、内容的にはこれまでの実践をなぞったものだった。

道徳的実践にしても、「あいさつ運動」「一人一鉢栽培」「地域の清掃活動」「児童会主体の学校行事」などすでに愛知川東小でやっているものばかりである。その内容的な堀下げも甘い。たとえば、「あいさつ運動」をとっても、運動を盛り上げるための方法の工夫だけで、なぜ、「挨拶しない子が昔に比べて多いのか」という原因をさぐり、そこから発想した実践がない。私自身は、「あいさつを交わし合える関係を育てることが、あいさつ運動の前提」だと考えているのだが。

地域との連携についても同様。学校便り、地域行事への参加など。名前だけはかっこいいが、独創的なものはなかった。

発表を聞きながら、こういう実践発表が毎年続くような研究会では、いずれ硬直してしまう（もうすでにそうなっているような気もするが）だろうと思う。瀬戸先生の講演でも、「形はほぼ、できた。しかしそれだけで道徳教育が充実したと考えるのは幻想だ。」と言っておられた。つまり、内容面での堀下げが今後の大きな課題だということである。しかし、その方向を感じさせる発表は一つもなかった。

ただ、発表の仕方だけは、さすがに全国大会、スライドなどをたくみに使って聴衆を飽きさせない工夫をしていた。

3 瀬戸先生の講演

早口でペラペラしゃべられるので、あまり頭に残らなかったが、ノートにメモしたことを報告する。

・「人間としての在り方生き方」を学校教育全体の中で意識して取り組むことが新道徳指導要領の根幹の思想。

例えば、英語の教師は英語を教えるにとどまっている。英語教育を通して何を子どもに教えるのかを考えよ。

・道徳の授業は「子どもの内なるものを表情・言葉として外に引き出し、それを自分自身で自覚させることだ」

つまり、自分の中の良いもの悪いもの含めて、様々な感情・あるがままの自分を自覚させること。

ふだん、無意識のうちにやっている行為を意識化させることもある。

・本当に道徳の視点に立って児童理解ができているか？

年間計画・資料は整ってもそれだけでは何の力にもならない。

どんな時、子ども自身が本当に素直に自分を開き、自分の姿をのぞきこむようになるのか、そういう子ども自身の思考に即して実践を深めることが今後重要。

・子どもの多様性・多様な価値観を前提として認めよう。認めた上で、多様性の中から自分の栄養として何事かをつかむ子どもにする。

・展開の後段での「今までの自分の生活をふりかえる」部分。ただ、「ふりかえる」だけではだめだ。「自分の生活をふりかえることによって、自分は自分に対してどうであったかに気付かせることが大事」・学級の雰囲気というのは、発問や展開プラン以上に授業の質を決定するほどに重要なもの。教師と子ども、子どもと子どもの間にどんな雰囲気がかもしだされているかによって、授業の質も決まってしまう。

今後、「雰囲気作り」をもっと真剣に受け止めてもらいたい。

◎新指導要領のポイント

- ・ 価値項目を低・中・高に分けてその数も変えた……内容の重点化
- ・ 4つの柱 「主として自分自身に関すること」

「主として他の人との関わりに関すること」

「主として自然や崇高なものに関すること」

「主として集団や社会との関わりに関すること」

どれも根底には「自分を見つめる」という方向性を持っている。